中国語に取り組む意欲向上の場として
――マルク中国語エリアの活動状況について――

青　野　英　美

The Activity of Chinese Area in MULC

Emi Aono

The Chinese area of MULC at Kanda University of International Studies has a real Chinese atmosphere due to its appearance, making and decoration. And reference books, DVDs, magazines and on-line teaching materials for practice exercises are prepared as auxiliary teaching materials. As a result, this is a valuable place for KUIS students of the Chinese major for support of autonomous learning of review, practice, application of contents learned in the classroom. In addition, it is a precious space to understand Chinese culture and Chinese way of thinking through various cultural events. It is hoped that further interaction with Chinese international students and native teachers will be conducted more actively in the future with repeated efforts by students to use them easily.

キーワード：マルク中国語エリア、自立学習の支援、文化イベント、朗読・スピーチコンテスト、中国語劇

0.　はじめに

中国語エリアは、本物の中国の建築材料を用いて、中国の伝統建築の特徴を取り入れて作られた、中国庭園風の学習空間である。

円形の入り口をくぐり抜けると、中央に「亭子」が佇んでいる。壁側の両隅には日本の枯山水のルーツと言ってもよい、山に見立てた奇岩「太湖石」が立ち、小池に見立てた数々の白い小石が置かれている。「亭子」とは、日本の公園や見晴らし台などでもよく見られる、屋根と柱だけでできた小屋で、休憩したり景色を眺めたりするのに使う、中国庭園でも代表的

な建物である。また、庭園の景色を様々な角度から眺められる通路「回廊」が、古典式窓が特徴的な教員室に繋がるように延びている。亭子や回廊には古式の灯籠が飾られ、朱の柱には「中国結び」の飾りが掛けられ、「福」の字の符が貼られている。

エリア自体はそれほど広くはないが、伝統的な中国建築の趣が凝縮された空間である。中には机や椅子も置かれており、中国にいるような雰囲気の中で勉強することができる。

エリアには机が 7 台[1)]、1 台につき 4 人が座れるようになっている。移動できる椅子は 4 脚あり、さらに亭子には 4 人ほど座れる。

外から見た中国語エリア

中国語エリアの中

この空間は、学生達にとって、学習の場、交流の場、文化体験の場として利用され、様々な挑戦と成果を上げている。全体において学生の中国語に取り組む意欲を高める大切な場所であると考える。

1.　学習の場

中国語エリアでは、 学生は自主的な学習、 学生同士の学び合いが主となっている。1 年次と 2 年次に必修の授業があるため、利用する学生は 1、2 年生が大半を占めている。エリアでは留学生と相互学習、先輩からのアドバイス、ネイティブ教員から直接指導など受けることができる。

1.1.　復習・予習中心の学習

様々な学習支援アプリが開発される今の時代、 外国語の学習が容易になったと言われている。 確かにスマホやアプリは学習に便利な道具である。意欲的に使う人が更に上達していくに違いない。しかし、言語習得は

1 人で考えて黙々と勉強するよりも、互いに発音や内容をチェックしつつ復習する、学習内容を応用するなど、学習相手がいれば学習効果がさらに上がるはずである。

中国語エリアは誰でも気軽に利用できる雰囲気を大事にしており、常に中国語を話さなければならないという規則を特に設けてはいない。各学年の学生は自分のレベルに合った学習内容に取り組む。1 年生は発音や基礎文法中心の内容で、テキスト通りに練習すれば自分でも成長が実感できる。2 年生は課題が多く、授業の合間にエリアで宿題をやる学生も多い。中国語専攻には自分たちで実際の会話を作って発表する必修の授業があるため、エリアで会話作成、確認、練習をすることが多い。3、4 年生の授業では中国語で書かれた様々な教材を使用しており、学生は中国の現状を知るために留学生や教員に質問しつつ課題を完成することもある。内容にもよるが、インターネットで調べた事柄は実際にチューター留学生や教員に確認することで納得し、実感が得られる。

復習・予習中心の学習は教室で習った内容やテキストの内容を強く意識するため、学生は 1 人か 2 人で取り組むことが多い。時には留学生や先輩、教員からヒントを得ながら応用も行う。応用ができた時の達成感と喜びは、そばにいれば伝わってくるほどだ。それによって次の取り組みにもつながっていき、学習の好循環になる。

中国語エリアはマルクの他のエリアと同じく朝 9 時から夕方 7 時まで開放されている。早い時間帯は利用者が少なく、集中できるため、決まった曜日に早く来て予習や復習、発音練習をする学生がいる。1 限が終わると、2 限に授業のない学生が宿題や練習をしに集まる。1 階は図書館なので、1 人で集中したい時は図書館で勉強する、友達と交流したい時はエリアに来るという、所謂マルクと図書館兼用の達人もいる。

1.2. グループ学習

グループ学習は主に 3 つの形によって行われている。1 つは学生たちが自発的にグループを作るパターン。グループのメンバーは同学年の学生が一緒になることが多く、居合わせた人と話が展開し、いつの間にかグルー

プになっている形もある。1、2 年生には教室で習った内容を発展させるパターンが多く見られる。学生たちが自発的に応用学習グループを作るには、活発的な中心メンバーが必要である。エリアに集まる学生は学習相手を求めて来るのだが、自分から声をかけるのが苦手で、誰かが積極的に話しかけてくれればそれに応じて参加する人もいる。この場合は中国語の既修者や親が中国系の学生がリーダーシップを発揮することが多い。また、先輩や中国人留学生、教員が声を掛ければ会話グループが形成するということもある。

もう 1 つのパターンは、中国や台湾への留学から帰ってきた学生たち、所謂留学組がいる。この留学組は中国語のレベルが高いだけでなく、実用的なコミュニケーション力も同時に培われている。留学の経験や感想など話題も豊富なため、中国語エリアの雰囲気を盛り上げている。彼らにとってマルクは留学時のレベルを保持する大切な場所である。時には留学に行っていない学生や後輩、中国人留学生も交えて学校内外のことに触れ、エリアに活気をもたらす。このようなグループは、参加メンバーの語学力を高めるほか、後輩たちにとって憧れの対象であり、学習の牽引力になっている貴重な存在だと言える。

また、ゲーム遊びを通して自然とグループになることもある。例えば 2017 年度卒業の男子 4 名は自ら購入した脳トレゲームで遊びながら自発的に中国語を話していた。ゲーム遊びには計算や提案、競争、失敗した時の言い訳と愚痴、成功した時の喜びなど複雑総合的な語学力が必要である。楽しみながら中国語を使う素晴らしい取り組みだった。彼らは当時学年最高レベルの語学力の持ち主で、そばで見ているだけでも他の学生にとっては良い刺激を与えてくれた。

グループ学習は話題が豊富で、エリアの雰囲気を盛り上げる。メンバーは習慣的に利用する学生が多く、ある程度固定する傾向がある。

1.3.　チューター留学生と交流学習

中国語エリアのチューター留学生は 13〜15 名ほどいる。チューター留学生は新学期が始まってから語学専任教員によって招集され、スケジュー

ルを組み、2、3 週目にチューターによる「談話空間」が始まる。チューター留学生の紹介と談話空間の時間割は中国語エリア入り口に掲載してあり、それぞれの担当時間が一目瞭然となっている。エリア内では、チューター留学生の活動は自由に行われている。日本人学生とチューターが 1 対 1 で勉強することもあれば、1 人のチューターに 5、6 名のグループになることもある。学習内容は学生が持ってきた宿題や会話練習など様々で、時には一緒に中国の将棋やトランプの中国式遊びをすることもある。広い意味でそれも勉強の範囲だと考えられる。

アルバイトやサークル活動で忙しくあまりエリアを利用しない学生も、学習に困った時はエリアを訪れる。エリアの常連学生と異なり、彼らは具体的な課題や質問を持って訪れる。その課題や質問も様々で、必ずしも学校の学習内容とも限らない。例えば中国に就職することを考えているが、どこが良いかなどの質問がある。彼らの多くは、問題が解決したらすぐ帰っていくのが特徴だ。そのような学生は課題や質問がはっきりしており、教員やチューターを頼りに来る。予め教員やチューターの都合を聞く学生もいるが、突然訪れる学生もいるため、チューターや教員が常にエリア内にいることが重要だ。

1.4. 課題や話題を探す場

エリアは中国語専攻以外の学生も宿題を完成させるためにしばしば利用されている。また、中国語専攻の学生は英語の授業でアジアの地域や文化について英語を用いて発表するという課題がある。場合によっては、エリアにいる学生やチューターあるいは教員がインタビュー対象になることもある。このような場合、学生はみな積極的に協力する。学生はこのようなことに慣れており、教員として学生のことを頼もしく思える。神田外語大学の授業が本当に実用的な授業が多いということだろう。

中国語検定試験や HSK 受験勉強のため利用する学生が多い。エリアには過去問集や解説書があるほか、パソコンに内蔵しているネット教材がある。学生は自分の課題として目標に合わせて取り組んでいる。また、レポートやプレゼンテーションのテーマ選びや資料集めに訪れる学生も多数

いる。マルクで練習したことは検定試験や教室で発表する時の自信に繋がり、次にまた練習に来るという、マルクは学生たちの「学習意欲」を刺激する場所である。

2.　交流の場

通信技術の発達によって、時空を超えて情報を得たり、人間同士のコミュニケーションが簡単にできるようになった。一方では、現実世界で、具体的な相手とのやり取りを苦手に感じる若者も増えている。外語大学生にとって、教室で学んだことを授業後クラスメートと一緒に復習・練習することは非常に重要である。復習・練習、さらに応用していくことは、他者とのやり取りなしには行えず、その過程で自然とコミュニケーション力が養われる。学生にとってエリアは、まさにその絶好の場所である。利用し続けていけば、エリアに訪れる先輩や後輩、留学生などと異質な他者（高松、2006）とふれあえる機会が増える。face to face のやり取りによって、交流を深めることもできる。留学生、先輩、教員とコミュニケーションすることによって、自分と異なる考え方や価値観に接し、視野を広げることもできる。このことはマルクを利用する大きな利点である。

2.1.　留学生との交流によって

中国語エリアでは交換留学生と学部留学生に、1 週間 13 人態勢でチューターを依頼している。交換留学生は協定校から選ばれた成績優秀者で、日本での学習期間は半年から 1 年である。学部留学生は IC 学科の学生が主で、4 年間神田外語大学で学習研究する。学部留学生の中には、日本語学校に在籍し、一度社会に出てまた大学に入学するという学生も多数存在する。彼らは日本語が上手で日本の文化や習慣をよく知っており、同学年の日本人学生より年上で社会経験が豊富である。

中国語エリアでは、交換留学生をチューターとして優先的に採用している。交換留学生のチューターからは彼ら母校の情報を知ることができ、将来交換留学に行きたい学生たちにとっても予備知識を得ることができる。交換留学生が帰国しても、これから留学に行く学生と交流が継続され、長

期的な絆を維持することになる。そこまで見据えると、チューターと日本人学生の交流は一層深まることになる。

チューター留学生のエリアでの活動は様々で、昼休みの学生が大勢集まる時間帯に、絵本の読み聞かせや中国の文化を紹介することも行っている。内容は各自で決めるため、難易度が様々である。時にはマイクを使うこともある。1年生でも簡単に理解できる話もあれば、留学経験者にしか理解できない話もある。時には当番の時間が終わっても、議論が続く光景もある。このような活動はまさに異文化への理解を促進することである。

学生とチューターとのコミュニケーションは、中国語の勉強だけではない。これから留学を考えている学生は交換校の情報を知ることもできる。留学生の出身地のことについてもいろいろ教えてもらうこともできるだろう。中国は広いので、それぞれの地域には特有な習慣があり、地域特有な言葉の訛りもある。学生にとっては、エリアでの経験は留学前の訓練になるはずだ。また、中国留学から帰った4年生にとって、チューターは絶好の交流相手である。留学帰りの学生が一番心配しているのは、戻ってから語学力が落ちることだ。彼らは就職活動が忙しくても、大学に来る日は積極的にマルクに来て、中国での経験などを話す。

このような交流は、チューターの留学生たちにとっても楽しみに感じており、当番以外の時間でも熱心にエリアに来てくれる。人数の限定でチューターになれなかった留学生は、ボランティアチューターとなってくれている。学生とチューターとの交流は学内に留まらず、サークルの活動、食事など延長交流が行われている。

2.2. 縦の交流

高学年の学生が、後輩たちに指導する光景もしばしば見られる。新学期が始まる頃は、1年生の発音指導で教員が忙しい。そこで、エリアにいる高学年生に、発音指導の補助をお願いしている。高学年生は自身の経験や体験をもとに説明できるので、時には教員より頼りになることもある。

低学年の学生は、大学生活のアドバイス、留学先の選定、就職活動の経験など貴重な知識や情報が得られる。それによって緊張感も刺激され、目

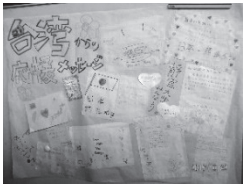
標や目指す方向をはっきり持つようになる。例えば留学から帰った先輩に中国の大学の知り合いを紹介してもらえる。何かあったらすぐ先輩に連絡できることも、安心感に繋がるだろう。先輩の学生にとっても、経験や助言が役に立ったことに達成感が得られ、自身の成長も確認できるだろう。

このような縦の交流があるため、卒業してもエリアを訪れる卒業生が多数いる。社会人になった彼らにとって、エリアは実家のようなものかもしれない。仕事のことや勉強・就職のアドバイスなどを語ることによって、彼らも自分のことを再確認できるとともに、後輩達にとっても吸収することが多く、学習面においても将来の進路選びにおいても参考になるに違いない。

2.3.　時空を超えた交流

中国語エリアには今も掲載している大切なメッセージがある。2011 年 3.11 大震災の時、台湾に留学していた学生が持って帰ってきたものだ。台湾の学生による、日本を励ます手書きの日本語のメッセージである。

台湾人学生からの応援メッセージ



「時を超えた交流」を題に

当該学生は卒業したが、それを見て感動した後輩が、「時を超えた交流」というタイトルで JAL 主催のスピーチコンテストに出場したこともあった。

交換留学で来日していた留学生が帰国した後も交流が続き、2 年後日本人学生が上海旅行に行った際、日本企業に就職した元留学生を訪ねてご馳走になったということもある。

ある時、学生が台湾へ旅行に行くので、元チューターにお土産には何がいいだろうかと尋ねたようだ。チューターは、「マルク」と答えたという。

こんな冗談が生まれるくらい、中国語エリアは彼らの留学生活に大切な場所であり、日本とつながる場所なのだろう。

2017 年に全日本スピーチコンテストで、「客家に嫁ぐ私」というタイトルで発表した学生がいた。彼女は 1 年生の時にマルクで台湾人留学生と知り合い、彼が帰国しても連絡を取り続け、2 年後留学に行った際親交を深めて、プロポーズされることになった。

このように、日本人学生と留学生との交流は、生涯の友や将来の人脈に発展することもあり、図りしれない資産に繋がることもあるのだ。マルクは大学の一教育施設というだけではなく、人的交流を世界中に広める可能性も秘めている。

3. 中国文化体験の場

マルクの目的の 1 つは、疑似留学空間ということだ。中国語エリアも、中国らしい雰囲気が作られている。毎日様々な交流がある中、異文化の空間が自然と形成されている。学生がより多くの中国文化に触れる、体験する場として非常に有益である。また、様々なイベントを通して中国の文化や中国人の考え方を理解するという意味でも得難い空間である。

3.1. 得意な技を披露する場

2014 年度に卒業したある学生は、中国茶の茶道具一式を寄付してくれた。彼は中国茶に関して大変詳しく、留学中お茶の産地を巡ったという。中国語も流暢で、誰とでも話ができる。エリアにいる時は、いつも中国茶を入れて皆に振る舞っていた。彼の周りに自然と人が集まっていった。お茶を楽しみながら話していると、とても和やかなムードになった。筆者も他の学生と一緒に、中国茶の入れ方を教わった。筆者は中国出身ではあるが、出身地は東北のため、南方のお茶の知識や入れ方を知らなかった。例えば鉄観音（ウーロン茶の一種）の入れ方とプーアル茶、ロンジン茶（中国の緑茶の一種）類の入れ方には違いがある。その後、筆者は学生たちに中国茶の知識を伝えている。

2016 年度に入学した学生の中には、マジックが得意な男子学生がいる。

トランプを使っていろいろな技を披露すると、エリアにいる学生が集まる。彼はマジック中に中国語や英語を使い、中国語専攻以外の学生も参加できるので、とても楽しく不思議なムードになる。

あるチューターの留学生が、ウクレレを弾きながら中国語の歌を歌った。ウクレレの音色も歌もロマンに満ちていて、お昼休みの癒やしになった。別のチューターは絵が得意で、様々なものをあっという間に描く。そこにも学生が集まり彼が描いた絵を鑑賞していた。それぞれ、回数はそれほど多くないが、マルクがあるからできることであった。

学生が卒業すればまた新たな学生が入学してくる。エリアは学生が得意な技を披露し、学生が交流を深める場ともなっている。

3.2.　マルク・イベント

中国語エリアでは、前期には餃子会、後期にはカラオケ大会という 2 回の大きな文化イベントを行っている。

餃子は形が古代中国の貨幣元宝に似ており、縁起の良い食べ物とされている。多くの地域において、お正月に欠かせない食べ物である。中国では餃子と言えば水餃子のことで、餡はもちろん、皮もすべて手作りする。時間と手間がかかるが、家族全員参加で作るのが一般的である。中国のもてなし文化では、お客さんを招待する際に料理を多めに用意することが通常のもてなし方で、食べきれないほど料理を作ることになる。招待された側は完食してはいけない。余るほどお腹がいっぱいになったということで、残すのが礼儀である。この文化を大事にして、餃子会の時も毎回大量に作るようにしている。

餃子会

カラオケ大会

お茶会

後期中間試験の後、マルクに隣接するクリスタルホールでカラオケ大会を開催する。1年生でも参加できるように前もって中国語の歌を練習するよう呼びかける。中国語エリアには、初代専任講師のT先生が中国から購入された、中国語専用のカラオケ機械がある。毎年内蔵された曲から選曲していた。近年、新しい歌が増えているが、学生に自ら伴奏を用意してもらうなどの操作で対応している。カラオケ大会は「大会」と称しているが、順位をつけず審査員も置かない。司会は留学生と日本人学生男女に依頼する。

このカラオケ大会で歌が上手だった学生は、全日本中国語カラオケ大会コンクールに挑戦している。これまで7名が本選に参加し、中国政府の招待を受けて上海で行われる決勝戦に進出している。参加する学生は熱唱するのだが、観客が少ないのが毎年の悩みだ。時間帯や曜日など調整する必要があるだろう。

エリアはまた、中国語専攻の学生が中心となっているサークル「無楽不作」(ウルブス)の活動の拠点の1つとなっている。「無楽不作」は年間様々な活動をしているが、中国茶を楽しむことも活動の内容の1つである。また、学期末にチューター留学生が帰国することになるので、学生たち主催で歓送会も行われている。

神田外語大学では、春休みと夏休みに集中講義「トライ中国語」を実施している。講義の対象は第二外国語として中国語を体験する他専攻の学生だ。この授業を受講している学生に、「MULCビジット」を2015年から催すようになった。1コマ分の時間を利用して、中国の文化も体験してもらうのが目的だ。中国的な雰囲気の中で、本物の中国茶と中国の茶菓子を楽しみながら、中国のことに関していろいろと語っている。普段中国文化に触れない学生にとって、1つ異文化の体験になるに違いない。ビジットが終わっても、毎回何名かの学生が残って、民族服を試着、写真撮影などしているのが印象的だ。

4. 挑戦する場、学習の成果を出す場

学生達は毎日勉強に励んでいるが、目に見える成果とは何であろうか。中国語検定試験やHSK(中国政府が行う中国語能力検定試験)などで、勉

強の成果を測ることもその 1 つだが、それ以外にも、学生達はいろいろなことへの挑戦に励んでいる。

4.1.　朗読大会、スピーチコンテスト

中国語専攻の学生はコンテストや弁論大会に積極的に参加している。

エリア内の掲示板には様々なスピーチコンテストの募集情報を掲載している。参加意欲がある学生が中国語原稿を作成し、教員が添削、発音を指導する。日本国内で最もレベル高いのは、NPO 法人日中友好協会主催の全日本中国語スピーチコンテストである。毎年 10 月に各都道府県で予選が行われている。本学の学生たちは、毎年この大会に「朗読」と「スピーチ」両方で出場している。その他にも幾つかの大会に参加している。

学外の各種のコンテストに 2010 年から参加して、延べ 67 人が受賞した（うち中国語スピーチと歌ダブル受賞 1 件）。

中国語関連コンテストの受賞状況（2010 年から現在）

スピーチ	31 人（うち 8 人が中国政府や台湾の招待を受けた）
朗読大会	28 人
中国語カラオケ	7 人（うち 5 人が中国の招待を受けた）
中国語作文	2 人（優秀作文として中国国際放送局に放送された）

朗読やスピーチ大会に参加することによって、参加する学生自身の実力が上がるだけでなく、他の大学の参加者と交流することを通して、さらに刺激を受けることになる。中国語の朗読やスピーチに関して、基本の練習は主にエリアで行い、会場の雰囲気に慣れるための練習はクリスタルホールを利用している。

4.2.　中国語劇

2016 年から浜風祭のイベントとして、ミレニアムホールで中国語劇を本格的に上演し始めた。それまでは、中国語専攻の学生サークル「ウルブス」が中心となって、10 分くらいの寸劇を学内の朗読大会[2)]の時に披露してい

た。浜風祭に上演された演目は、2016 年は『シンデレラ』、2017 年は『西遊記・三打白骨精』、2018 年は『不思議の国のアリス』だった。中国語劇は中国語専攻各学年の有志で参加するが、演目は集まった学生たちで相談して決める。語学専任教員が台本制作と発音・演技指導を行う。

2016 年

2017 年

2018 年

前期に企画し、夏休み明けの後期から本格的に練習を始める。参加メンバーの連携が大切で、皆が一体となって頑張る。本番の上演はミレニアムホールだが、練習の場は中国語エリアが中心となっている。マルク職員の協力を得ながら、クリスタルホールやその他大きい教室で練習することもある。大道具小道具や衣装制作のほか、照明、音響、背景など、語学分野以外の協力も重要である。劇の参加者は毎年 20 人前後で、長い時間を一緒に練習することで学年を超えた仲間となり、上演後の達成感も大きい。参加者自身にとっても大きな励みになるだけでなく、他の学生にとっても刺激になっている。これも、マルクにエリアがあるから取り組めることである。

4.3. 通訳ボランティア

中国語専攻の学生は、地域の語学通訳ボランティアにも参加している。

2015 年～2017 年の 3 年間、中国四川省から小学生（30 人前後）が千葉市立打瀬小学校を訪問していた。日中の小学生はお互いの言葉が通じないため、中国語専攻の学生がその交流通訳のボランティアを担った。参加する意欲がある学生が申し込んで、事前にマルクで通訳練習を行い、当日小学校の各教室へ入って通訳を務めた。通訳は高度な語学力を要する仕事なの

で、学生にとって緊張と不安は大きかっただろうが、大きな励みにもなったに違いない。

2015 年

2016 年

2017 年

スピーチコンテストや中国語劇、通訳ボランティアは、いずれも繰り返し練習することが必要だ。そのための、招集、指導、練習の場所として、また、就職や在外公館派遣員の模擬面接などで、マルクは欠かせない存在となっている。こうした活動を続けていくことは、中国語専攻の伝統を築いていくことであり、延いては大学の発展に寄与することになるだろう。

5.　エリアの正常運営を支えるには

5.1.　連携体制及び語学専任教員の役割

エリアの日常的な運営に関し、言語、文化などソフト面の教育内容は、語学専任教員が責任を持つ。エリア内での活動は、基本的に学生が各自で取り組むことになっている。語学専任教員は、日常的に彼らが利用しやすい環境作りに努めている。チューター留学生の招集とスケジューリングもその一環だ。普段、学生達の様子に注意し、細かくかつ公平に対応しなければならない。

マルク事務室は、ハード面の管理はもちろん、留学生チューターの出欠管理や語学専任教員不在時の対応など、種々様々な支援を行っている。餃子会、カラオケ大会、MULC ビジットなど大型イベントにおいては、企画から実施まで職員の強力なサポートがあったからこそ遂行できた。スピーチや中国語劇練習場所の確保などでも、協力していただいている。これまでのマルクでの活動が順調に行えたのは、マルク事務室の連携協力の

おかげであり、これは運営体制が機能している結果だろう。

5.2.　語学専任教員と学科専攻教員との連携

中国語エリアは、学科の教員との情報共有と連携も行われている。

書籍や映像資料の選書と更新、全体運営面への提案とサポート、エリアでできることを一覧にまとめること、 語学専任教員の日本語に関するサポート、授業内容にマルクの活動を取り入れていただくなど、学科の先生方から多大な力を借りてきた。語学専任教員と専攻の教員間の連携が良ければ、学生の問題点などの情報を共有することで、ピンポイントで対応・サポートできる。教室とマルクが、学生の言語能力を連動することによって、高めることに大きく貢献している。

ほかにも、マルク・イベントの企画、参加者の募集、実施まで、様々な協力が図られている。各種大会のスピーチや演劇の準備、練習、指導など教員の仕事は多岐にわたるため、今後も教員間の緊密な協力関係が欠かせない。

6.　課題と展望

中国語エリアは様々な取り組みを試みているが、利用者数を上げることは大きな課題だと言える。2017 年度から英語の必修が増えることでサルク（SALC）を利用する学生や、授業が終了後すぐ帰宅しアルバイトをする学生も一定数存在している。

中国語専攻の学生の利用状況はマルク事務室による利用者のアンケートの統計で分かる。次の表[3]は 2014 年度から 2017 年度 4 年間のデータによる。

中国語専攻 1、2 年次の利用状況

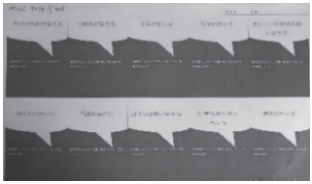
	2014 年	2015 年	2016 年	2017 年
利用する	43％	29％	49％	43％
あまり利用しない	40％	42％	37％	43％
全く利用しない	17％	29％	14％	14％
（利用する回答者） 1 日に利用する時間（30 分以上）	87％	70％	87％	82％

エリアを「利用する」という回答する中には「毎日利用する」、「週 2 ～ 3 回利用する」、「週 1 回利用する」が含まれる。「全く利用しない」と回答した人の理由は、「移動が面倒くさい、遠い・行く時間がない、Wi-Fi が弱い・電波が悪い」が多いが、「席が空いてない・混んでいる・狭い」といった回答も毎年多い。少数の意見ではあるが、「入りにくい・行きづらい雰囲気・排他的」という回答もある。

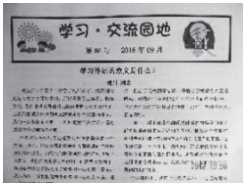
利用者の中には、習慣的に利用する学生とは逆に、利用しようとしているが、いつも学生が多数いて自分の居場所がないと感じる学生も少なからずいる。このような学生はさらに利用回数が減り、徐々に「アウェー感」を抱いてしまう。この状況を改善すべく、2018 年 4 月に机を一台と椅子 6 脚を増やしたが、状況はあまり変わっていないようだ。

2015 年と 2016 年、「MULC タスクカード」[4]を使って教室で習った内容をエリアで発表する試みを行った。

MULC タスクカード



学習・交流園地



この学習方法を復活しようと考えている。また、全学生に対し、マルク教員、留学生チューターのスケジュールを把握するよう呼びかけ、授業時間以外に「MULC コマ」を作るよう提案する。質問や助けが必要な時には「すぐマルク」という環境作りにさらに力を入れたい。

「学習・交流園地」[5]という学習だよりは、これまで 87 号発行してきた。ただ、多忙な時期は、2 か月に 1 度の発行となってしまった。学生が書いた作文が掲載されることで、本人も周りの学生にとっても良い刺激になると思われる。今後は、できれば月刊ペースで発行したい。

5. 最後に

マルクは学生が授業で習った知識の復習、練習、応用する場であり、仲間や先輩、留学生との交流によってコミュニケーション能力も同時に培う場でもある。

中国語エリアは今後も、学生が気軽に利用できる工夫を重ね、学生にとって勉強と交流を通じて中国語に取り組む意欲向上の場として、また、社会人になるための羽ばたく練習の場として、重要な役割をはたし続けることだろう。

注

1) 2018 年から 1 台増やし 7 台になった。
2) 建学時は中国語学科、2012 年から中国語専攻と改編。1 年次が朗読大会、2 年次は暗唱大会を行っている。2017 年から 1 年次の朗読大会のみ行うことになった。
3) マルク事務室は毎日訪れる学生の人数をチェックし、そのデータを統計している。さらに毎年前期と後期に全学生に対し利用アンケートを実施している。表のデータは「MULC 利用に関するアンケート」より「中国語専攻 1、2 年生対象」の部分から引用。
4) 中国語専攻 1 年の必修科目の 1 つ『中国語総合 I』のテキスト内容と連動するタスク（例：誕生日が言える、好きな食べ物が言える等）のチェックカード。植村麻紀子先生作成。
5) 中国語学習者の中国語作文や中国文化に関する簡単で短い内容のものを筆者が編集して配布する読み物。一号につき A4 サイズ 4 枚分。2007 年からこれまで 87 号発行してきた。

参考資料

神田外語大学多言語コミュニケーションセンター『MULC 利用に関するアンケート』（2014 年度 –2017 年）

高松正毅（2006）「現代のコミュニケーション環境と コミュニケーション論をめぐって」『高崎経済大学論集』第 49 巻、第 2 号、112 頁
http://www1.tcue.ac.jp/home1/takamatsu/Theses/takamatsu2006c.pdf

打瀬小学校ホームページ
http://www.baytown-news.net/eBook/Vol214.pdf

打瀬小学校ホームページ
http://www.baytown-news.net/eBook/Vol237.pdf

神田外語大学ホームページ
https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0510_0000002858.html
神田外語大学ホームページ
https://www.kandagaigo.ac.jp/kuis/kuis_news/detail/0510_0000004170.html